

ボナミ家のクリスマス

定方 晟

1963年の冬、留学生としてパリにいた私は、ある司祭が企画したホームステイに応募した。先日、篋底を探っていたら、古い書類のあいだからそのときの記録が出てきた。すっかり忘れていたが、何かに発表するつもりで書き、発表する機会を逸して、そのままになっていたものである。

最近の世の中の変化はめまぐるしい。フランスの田舎でも例外ではないだろう。すでに1世代も前のこととなった出来事のこの記録は、もしかすると失われた過去を留める貴重な資料になるかも知れない。個人的な体験ではあるが、歴史的、文化的な資料にもなりうると考えて、ここに発表する。

私は本誌前号でキリスト教をきびしく批判した。読者は私の今回の発表を見て意外の感をもつかもしれない。そこでこのことについて一言しておきたい。私はキリスト教に対しては批判的であるが、キリスト教徒に対してはそうでない。私の友人にはキリスト教徒やプロ・キリスト教が大勢いる。たぶん、人間は思想より大きく、思想が律しきれない深く複雑な存在だからであろう。むしろ、私はほかの人に対してよりも彼らに対して親近感を抱く。私はその理由をこう考える。キリスト教に関心のあるひとと私は、世俗的なものに満足せず、形而上的なものを求める点で共通しているのだ、と。私が自分と世界が違うと感じるのは宗教に関心のない人に対してである、と。

アヴェーヌ (Avesnes) 郡、サル・ポトゥリ (Sars-Poteries) の司祭メリオー氏の企画した外国人学生招待に応じてわれわれ日本人九人がパリを発ったのは十二月二十三日であった。急行で二時間、次第に雪景色が車窓を覆うようになって間もなく、下車駅のオールノワに着くと、同じく招待を受けたアフリカ人のグループと一緒にになり、出迎えの十台ほどの自動車で目的地サル・ポトゥリに案内された。サル・ポトゥリの公民館でいったん勢ぞろいし、お茶など飲んだあと、サル・ポトゥリおよび近在の七つの村の農家あるいは職人の家に一人ずつ分散して宿泊することになった。

この招待はクリスマスを中心に一週間から十日にわたって受け入れてもらうもので、滞在費は一切向こうもちであった。学生を受け入れた家々はみな熱心なカトリック信者であるということであった。この催しは今年で四年目で、今度受け入れるのが四度目という家もあった。私の泊った農家はソルル・ル・シャトー (Solre-le-Château) というかなり大きな村に属していたが、家は村はずれにあり、他の二、三軒の農家とともに牧場の中にあつた。以下、二十三日から三十一日まで、この農家の生活を中心として見聞したことを書いてみよう。

まず驚いたのは、家に導き入れられたとたん、どこからか大きな声が聞こえてきて、大きなからだのおかみさんが現れたことである。連れてきてくれたこの家の主人が頭のはげた温

厚そうなひとだったので、予想外のことだった。大きな声で、お前の名前は何かときくので、私が答えると、姓でなく名のほうをとって、これからはお前は家族の一員だから、アキラと呼ぶことにする。お前は、家の子供たちを呼び捨てにし、チュトワイエ（お前、ぼくの話し方）をしなければならない。ただし、私と主人にはヴウヴォワイエ（あなた、わたくしの話し方）を使っていいとのことだった。

アキラの発音がへんなので、二、三度なおしてやったが、あまりよくもならなかった。しつこく直すのもこわいので、そのままにしておいたら、アカラといたり、アクラといたり、キラアといたりしていた。

最初に入った部屋は食堂を兼ねた居間であったが、隣に立派な応接室があり、奥には台所があり、二階には数ケの寝室があり、洗面所があった。地下室もあり、ここからよくビールやブドウ酒を出していた。

このボナミ家には、この母屋のほかに棟つづきの数ケの部屋があり、離れたところに二つの大きな家畜小屋があった。通された部屋部屋に二、三ケずつの十字架がかけてあった。便所にも一つかけてあった。ここがお前の寝る部屋だと案内された部屋に入ると、片隅で勉強していた青年が立ち上がって握手を求めてきた。

かれはボナミ家の三男で、ノエルといい、十七才、神学校研究生である。学期中は遠く離れたところで寄宿生活をしているが、いま休暇中で帰省しているとのことだった。トロンペットを練習しており、部屋がかれだけになると吹いていた。かれはドイツ語を勉強しているが、英語は知らない。

二男のジャンマリは十八才、ノエルと同じベッドに寝ている。私は別に急造したらしいベッドに寝た。最初の夜は寒くて寝られなかった。ボナミ家の息子たちは寝つきがよく、三男はしきりにうなされていた。

馴れてくると、マダムはなかなか親切なひとだということがわかった。ボナミ家が外人客を受け入れるのはこれが初めてだけに、マダムは非常に気を使っていた。私が寒いといたら、翌晩からは電気ストーブで部屋を暖めておいたり、湯たんぽをベッドの中につっこんでおいてくれたりした。私が彼女の写真をとろうとすると、いつも逃げてしまうか、横からとってくれとか、冗談をいう。

二十四日からは、親子四人からなる一大家族が数日どまりでボナミ家を訪れ、また兵役義務から帰っていた長男（二十一才）が婚約者を連れてきており、ボナミ夫婦、二男、三男、長女（十二才）、別棟に住む血縁のおばあさん、身寄りがなく養ってもらっているおばあさん、住込みの若い雇い人、それに夜は隣村のベルギー人の地主とその老母が客となって加わり、賑やかな晩餐が催された。

親子四人の家族というのはP氏で、炭坑夫だが、いまストライキをやっており、クリスマスを祝う余裕がないので、見ず知らずのボナミ家が受け入れてやったらしい。P氏のような炭坑夫はたくさんいて、それを篤志家が受け入れることになったので、ボナミ家はその一つなのである。これを見ても、ボナミ家はかなり裕福な家のように思われた。

見ず知らずといっても、他人行儀のところはなく、招かれたといっても別に卑屈なところ

はなく、P氏夫妻も二人の娘たちも活発にはしゃいでいた。なにも知らないひとは、かれらが長年の知己であると思ったかも知れない。むしろ、眼鏡をかけたこの炭坑夫のほうがボナミ氏よりインテリ風で、いつも早口に弁じ立てていた。ボナミ氏は主席にすわって、にこにこしながら言葉すくなく喋っている。その横では、長男のベルナルが膝の上に婚約者のをせて、キスをしたりしている。彼女は肉屋の娘で十八才。素朴で、ふくらんだ頬がいつも笑っている。ときどきベルナルに別れのキスをして、かれの膝から下り、ボナミ夫人の手伝いをする。彼女は町のどこかのカウンター係だそうだ。

お腹の出たベルギー人の地主もよく喋る。かれは病弱で結婚しないのだそうだ。彼はちょっとした時間をみて自動車に私を乗せて彼の家に案内し、アシェットの世界美術全集の日本の部などを見せてくれた。

居候のおばあさんは黙々と食べている。ジャンマリもノエルも雇い人もときどき喋るが、概して大人たちの話を聞いているほうが多い。ノエルはとくに口数が少なく、話しかけられたときだけ、にこにこしながら答える。娘のモニックはお客の娘二人と、席から離れたり、戻ったりしている。ボナミ夫人も大きな声で喋り出す。自分の考えを聞かせようというよりむしろ会話の方向を適当に案配しているという風だった。男たちが勝手に自分たちの議論に熱中していると、ボナミ夫人が突然大きな声で、「箸を使うのは難しいか」とテーブル越しに私に聞いてくる。その声で、座は一瞬沈黙し、やがて日本の文化に関する話が始まるという具合である。そのほかマード・イン・ジャパンというのが彼女のおはこで、私がみなのお喋りからとり残されたと見てとるたびに、灰皿やお菓子を指さして、日本のでもないのに、マード・イン・ジャパンとって、にっと笑って、私を退屈から救おうとするのだった。ボナミ夫人は外見に似あわず、なかなか繊細な心の持ち主だと思った。

話が進行するうちに彼らが日本についてどの程度の知識をもっているかがわかってきた。P氏夫妻がその知識を披露した。P氏は、日本はトランジスターとカメラがすぐれており、カラーテレビやポータブルテレビはフランスにもまだないのに日本にはあると他のひとびとに教えていた。P氏夫人は、日本は四つの島からなり、ひとつはホンド、ひとつはエゾというといっていた。(ちなみにパリの書店に並んでいる地図のうち、半分は北海道をエゾと記している)。ボナミ家のひとは何も知らなかった。

土産と宣伝を兼ねてもっていった日本に関するパンフレットを見せたところ、P氏夫人が日本の人口や労働者の賃金などの記事を読み上げ、P氏が自分たち労働者の賃金と比較して説明を加えた。ボナミ家のものはにこにこして聞いていた。ときどきボナミ夫人が大きな声で、スープはおいしいかどうか、肉はおいしいかどうかと聞く。みんな慌てておいしいと答える。実際、おいしかった。肉も珍しい獣の肉で、大変な御馳走だった。

それからボナミ夫人は私に箸を使ってみせろといい、どうやってごはんをこぼさずにいられるのかと訪ねたので、フランスのごはんはサラサラしてねばりけがなくこぼれやすいが、日本のごはんはねばりけがありこぼれにくいと答えた。そのときP氏の下娘がやってきて、私に「二たす四はいくつか」などと初歩の足し算や掛け算、あるいは「私は垣根を飛び越える」などという簡単なフランス語の文章を書かせたりして、私にそういう教育があるかどうか

かを試しているふうだった。そばからP氏夫妻がしきりに娘をたしなめていた。

ボナミ家の娘はいつもシナと日本を間違えていた。私が彼女にあげたお土産を、P氏の娘たちに見せては「シナの」といっているのです、そのたびに私が「日本の」だと注意してやると、彼女は照れたように首をすくめて、「日本の」といいなおした。そのうち、やっと「日本の」という言葉になれて、テレビに日本に関する場面が出ると、「アキラ、アキラ、日本の」と呼んでくれた。テレビはこちらでは貴重品である。テレビのある家はこの村でも多くはない。その代り、自動車はどの家にもある。ボナミ家には乗用車が二台、運搬車が一台あって、マダムも運転できる。

長い夜食が済んで、十二時近くになったころ、小さな子供たちを家に残し、一台の乗用車に八人の大人が重なりあって乗り込み、村の中心にある教会に行った。ミサは始まっていた。大きな教会の中がひとで一杯だった。ボナミ夫人は私とジャンマリを従えて、どんどん前へ出ていったが、ボナミ氏はP氏夫妻と入り口にとどまったままだった。神学校研究生のノエルはすでに一番前に坐っていた。聖パンを拝受するときには会場のほとんど全員が参列したが、ボナミ家はマダム、ジャンマリ、ノエルだけが参列した。雇い人は「無神論者」だとのことであった。

まもなくミサが終わったので、また自動車に乗って帰ったが、翌朝と翌昼にもミサが行なわれるとのことであった。夜のミサには同行の日本人M氏も来ていた。

二十七日には招かれた外国人学生と地元の青年が一台のバスに同乗して、この地方で有名な陶器製造工場とガラス製造工場を見学した。工場はいずれも手工業に属するタイプであったが、オートマチック製のも他にあるという話だった。ガラス製造工場では暗いごたごたした建物のなかで、灼熱したガラス玉を運んでいる多くの子供たちの姿が印象的だった。

往路の途中で、バスが国境を越えてベルギーに入ったとき、メリオ神父が「二年前に日本人が招待されてきたときには、彼は国境だというのに海がないのは不思議だといっていた」という冗談めかした話を披露した。この晩、公民館で、日本大使館から借りてきた東京と京都の映画フィルムが紹介された。同行の日本人にきくと、映画は村人に好評で、各家庭でいろいろな質問が出たとのことだったが、ボナミ家はパンフレットのときと同様、とくに関心を示さなかった。ボナミ家はどうも知識欲がないらしかった。

ボナミ家は朝早く起きる。ジャンマリは六時ころ、父親に起こされて、家畜の世話をし、私が起きるころにはまた寝ている。月曜日は一日中、ボナミ氏の姿が見えないと思ったら、毎月曜の習慣で狩にいったそうだ。なるほど居間にかけてあった猟銃のうち一つが見えない。夜帰ってきたときは、小さな箱をもってきただけで、不猟だといっていた。

二十五日の晩は牛の子供が生まれた。見に行ったが、母牛が横たわって目を白黒させており、現れかけた子牛の前足に綱をかけて、ボナミ氏とジャンマリと雇い人がエイヤエイヤと引っ張っている。すごい荒わざだと思ったが、子牛は無事に生まれた。翌朝聞いたら、そのあと別の牛がもう一頭生んだそうである。

ベルナルとその婚約者も帰ってしまった。炭坑夫夫妻も帰ってしまった。少し淋しくなったが、新しい訪問者は入れ代りやってきて食事をしていく。マダムは「神の家」だといっ

て自慢していた。ボナミという名前がすでに「良き友」を意味している。私とノエルはP氏夫妻が泊っていた部屋に移った。

二十九日にはバス二台を連ねてベルギーのブリュッセルへ旅行した。黄、黒、白が仲良くまじりあって坐席を占めるようにと神父は何度も繰り返していった。人種の融和が今度の企画の目的の一つなのだろう。地元の子供たちははしゃぐのが好きだ。アフリカの子供たちもさわぐ。もと植民地だったアフリカ人にとってはフランス語は第二の母国語であり、フランス語を話すには馴れているようである。日本人の学生は高い年齢と貧弱な語学力のせいか寡黙でおとなしい。(私は二十七才。他の日本人もほぼ同様。日本人は童顔なので二十才くらいに見られたかも知れない。)勧められてもなかなか歌を歌わないので、神父が「日本人は臆病すぎる」といった。ベルギーの教会ではミサに参列し、ブリュッセルでは名所を見学して帰った。

サル・ポトゥリの辺りはベルギーの国境に近いので、村人も簡単にベルギーへ入れる。ボナミ氏も顔で税関を通り、ベルギーの煙草を買って帰る。

町へ出るのには自動車で行く。ある晩は、ジャンマリが運転し、炭坑夫夫妻、ノエル、私と五人で二十キロ離れた町へ映画「大脱走」を見にいった。ボナミ氏が用事で町へ行ったときや、ボナミ夫人がノエルの靴を買いにいったときにも、私は乗っていった。ボナミ氏は帰りがけにある電気商の家に寄り、マルチンを連れて帰った。ボナミ夫人の話によれば、彼女がマルチンを生んだときは、難産で帝王切開をし、病院に数ヶ月もいたので、彼女を電気商に預けたのだそうだ。それでマルチンはいまでもときどき養母のところへ数日を過ごしに行くのだそうだ。私がモニックやマルチンにお土産をあげたら、マダムが彼女らに「大キスをしなさい」といったので、二人が近づいてきて、私の右の頬に音をたててキスをした。

三十一日、ベルギー人の地主アンドレさんの家へボナミ夫妻とノエルと私が呼ばれていった。アンドレさんはベルギーにも家をもっており、両方で一年を半分ずつ暮らすのだそうだ。彼の家には小作人が三人ほど住んでいた。道の向こう側にはベルギー人の食料品屋がある。ボナミ氏は信仰には熱心ではないが、柔らかい話だと乗り気になる。その晩もアンドレ氏とさんざん冗談をいいあっていた。「ブドウ酒の瓶をあけるのは女と変りない」。封印を切って蓋を抜きながら「さっきは娘だったが、いまは女だ」などといっている。ジャンマリにはフィアンセがいる。しかし、つい一ヶ月前、夏休み休暇でボナミ家に泊りにきていたドイツの娘(二十才)が、夜、寝ている彼の足をさわりにきたそうだ。ジャンマリは気が弱くて、彼女から逃げ、彼女はドイツに帰されたそうだ。ボナミ氏は「ベルナルなら、うまくやって、うまく脱けだすのだが・・・」と無然とした表情だった。

ジャンマリはそのフィアンセをダンスパーティで見つけてきたのだが、これは二度目のフィアンセである。最初連れてきた娘はマダムの気に入らなくて諦めたそうだ。ボナミ氏は「嫁を選ぶのはマダムだ」と冗談をいっていた。

われわれ外人の宿泊名簿に「カメルーンのマドモワゼル・セシルはその娘フロランスとともにN氏宅に」とあったのを私が話題にした。「マドモワゼルはマダムの間違いではないか」。ボナミ夫人は「間違いじゃない。彼女は子供を生んだけど、捨てないでちゃんと育てている。

彼女は罪を立派につぐなっている。偉いじゃないの。』

ジャンマリは農村青年団体のカトリッククラブか何かの委員をしている。彼のところへ神父がきたとき、私も少し話をしたが、若いひとは世俗化への傾向にある、女性は農家の嫁になりたがらない、などと日本で聞くのと同じような話を聞かされた。ノエルは神学研究生である。私が彼に神父への道を選んだことを後悔しないかと聞くと、しょっちゅうためらっているといった。「君のような神学研究生はたくさんいるのか」と聞いたら、「村の二千人の人口のうちぼく一人だ」と答えた。

私はこれらの話を聞いたあとでも、村人にはまだまだ強い信仰が生きており、キリスト教は彼らの良心の基盤をなしていることを疑うことはできなかった。私は客人に対するボナム家の度量の大きさに感銘を受けつつ、雪のすっかり消えた村をあとにしてパリへ向かった。